さくら咲き　心地よいまち　ずっと　めぐろ

目黒区

面積 ……14.67㎢
世帯数 ……157,400世帯
人口 ……278,415人
（うち外国人）……8,767人
予算 ……1,152億円
職員数 ……2,061人

目黒区総合庁舎
文化的価値の高い既存建物を改修し平成15(2003)年1月にオープン。中目黒駅周辺の高層ビルを背景に。

目黒川の桜
区内の目黒川沿いの約3.8キロに800本ほどの桜が続き、人気の花見スポット。

目黒のさんま祭
目黒区民まつりで行われる、落語「目黒のさんま」に因んだお祭。友好都市・気仙沼市の皆さんが持参したさんまを焼いて提供。

歴史・見所・名所

太古から人々が住み、集落を形作ってきた目黒。鎌倉幕府の公的記録をつづった『吾妻鏡』では、建久元(1190)年11月の条に、武蔵武士目黒彌五郎の名が記されており、歴史上では鎌倉時代までさかのぼることができる「目黒」ですが、地名の由来は定かではありません。江戸時代には、大都会江戸に生鮮野菜などを供給する典型的な近郊農村として発展し、将軍のタカ狩りの場としても有名になり、目黒不動尊など目黒三社への「目黒詣で」に向かう人々を、江戸市中からたくさん招き入れました。明治以降は駅を中心に竹林や畑が宅地へと変わり市街化が進み、昭和7(1932)年に目黒町と碑衾町が合併して目黒区が誕生、令和4(2022)年に区制施行90周年を迎えました。

区内には、国の重要文化財に指定された旧前田家本邸、瀧泉寺(目黒不動)、円融寺などの古刹や東京大学、東京工業大学などの文教施設も多く、歴史に彩られ、文化の薫り高いまちです。「自由が丘」「中目黒」などのおしゃれなエリアもあり、「住んでみたいまち」として人気の高い地域です。

概要

23区の南西部、武蔵野台地の東南部に位置し、目黒川、呑川による谷地と目黒台と呼ばれる台地が織りなす起伏に富んだ地形で、坂の多いまちをつくっています。面積は14.67㎢で23区全体の2.3%にあたり、23区中16番目の広さです。交通の利便性が高く、都心に近い良好な住宅地として発展してきました。

国勢調査に基づく人口は、昭和40(1965)年に30万人近くに達したのをピークに減少に転じ、平成7(1995)年には24万3,100人となりましたが、令和2(2020)年には28万8,088人に回復しています。

主要課題

1　ＤＸの推進による区民サービスの向上

行政手続のオンライン化、窓口手続のワンストップ化、支払いのキャッシュレス化を進め、同時にデジタル技術の活用を困難に感じる方が取り残されることのないよう、デジタルデバイド対策に取り組みます。

2　自然災害や健康危機への対応力の強化

自然災害に備え、災害対策本部の組織体制を見直し、災害時の要配慮者支援及び情報発信力の強化に取り組むとともに、豪雨対策の推進により災害に強い街づくりを進めます。また、発災時における医療救護体制の強化を図り、新型コロナウイルス感染症対応の経験を健康危機管理の強化につなげます。

3　未来を担う子どもを育む環境の充実

こども基本法及び目黒区子ども条例に基づき、子どもの権利が尊重され、身近な地域で安心して子育て子育ちができる環境の充実を図ります。また、中学校統合新校の整備や学校施設の計画的な更新を進め、児童・生徒の教育環境を整備するとともに、教育ＩＣＴ環境の充実を図ります。

4　地域の賑わいや活力の向上

地域経済の活性化を目指して、事業者が創業しやすい環境を整備するとともに、消費者・事業者及び商店街のデジタル化支援、区内消費のキャッシュレス化を進めます。加えて、区内中小企業の時代に即した事業継続への取組み、商店街の活性化に対する取組みを支援します。

5　福祉の充実と健康づくりの推進

様々な福祉ニーズやコロナ禍で顕在化した社会的孤立・孤独等に対応するため、福祉の包括的支援体制の充実を図ります。また、高齢者の健康づくりと介護予防を一体的に行い、フレイル対策や健康寿命の延伸につなげていくための取組みを強化します。

6　快適に住み続けられる街づくりの推進

都市計画道路整備と一体的な沿道周辺の街づくり、木造住宅密集地域における防災まちづくり、民間活力を導入した公園機能の拡充などの街づくり事業を公民連携により推進し、安全で快適に暮らすことができる都市環境を整備します。

旧前田家本邸
区立駒場公園内にある旧加賀藩主前田家の本邸（和館・洋館）で、平成25（2013）年に重要文化財に指定。

目黒天空庭園
大橋ジャンクションの屋上に平成25（2013）年3月にオープン。巨大なループ状の回遊式公園で、四季折々の草花を楽しめる和風庭園。

7　ゼロカーボンシティの実現に向けた取組みの推進

2050年のゼロカーボンシティ実現に向け、区有施設の電力供給や庁用車の脱炭素化、公園等照明のＬＥＤ化、区有施設の改築における省エネルギー化など事業所としての取組みと家庭や区内事業者の環境配慮行動への理解促進を推進します。

将来展望

少子高齢化に伴う様々な影響の顕在化や新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機としたデジタル化への変革、Society5.0の実現、脱炭素社会への取組みなど、社会変容の速度が増しています。こうした変化の中でも、あらゆる世代・立場の人々にとって快適で暮らしやすい環境を整備するとともに、将来にわたって持続可能な行政サービスを展開していく必要があります。

このような認識の下、目黒区は、令和3（2021）年3月に区政の未来を描く基本構想を、令和4（2022）年3月にそれに基づく新たな基本計画を策定しました。基本構想では、おおよそ20年先に目指すまちの将来像を「さくら咲き　心地よいまち　ずっと　めぐろ」と定め、社会や環境が変化する中にあっても、地域で暮らす人や働く人、学ぶ人はもちろん、訪れる人など、誰にとっても、いつまでも心地よいと感じるまちを目指します。

また、その将来像を実現するために、「平和と人権・多様性の尊重」「区民と区が共に力を出し合い連携・協力する区政の推進」「未来を見据えた持続可能な行財政運営」の3つの区政運営方針と、「学び合い成長し合えるまち」「人が集い活力あふれるまち」「健康で自分らしく暮らせるまち」「快適で暮らしやすい持続可能なまち」「安全で安心して暮らせるまち」の5つの基本目標を掲げ、施策を展開していきます。

今後も複雑化・多様化する行政課題に対し、迅速かつ的確に対応し、区に関わる全ての方にとって「心地よいまち」となるよう区政の推進に努めていきます。